



TITLE:

葬埋雑記

AUTHOR(S):

水野, 清一

CITATION:

水野, 清一. 葬埋雑記. 東洋史研究 1943, 8(4): 242-246

ISSUE DATE:

1943-11-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145799>

RIGHT:

葬 埋 雜 記

水 野 清 一

一、衣 衾

昨秋、大同省陽高縣古城堡の漢代古墳を發掘した際、絹ぶとんをまいてミイラのやうなたちをした遺骸を發見した。發掘調査のゆきとゞいた朝鮮樂浪漢墓の發掘にもまだこのことはきかぬし、織物の豊富であつた北蒙ノインウラの漢墓にもこんな例はない。

絹をぬひあはせ絮をいれてふとんにつくり、それくるくる何重にもからだにまきつけ、その上からひもでしつかりとくゝつてあつた。ひもはある間隔をおいて一條づゝ横にかけてあつて、上でしつかりとゆはへてあつた。一體について五六個所くゝつたらしいが、ある場所にはなゝめ十字にかけてあつた。

『後漢書』卷一六禮儀志には大喪に黃縣緹縵をいれる

といひ、その注にひいた『漢舊儀』には緹縵十二かさねをまいたといふから、漢代の帝王もこれと同様なことをしたものとおもへる。

『墨子』節葬篇に上代の帝王は質素で、かならず衣衾三領にすぎなかつたが、近代ますます奢靡におもむき衣衾萬領にいたつたといつてゐる。衣衾の萬領はどうして葬るかわからぬが、戰國秦漢時代にかけては、とにかくからだを衣衾でまきつけ、それをきつくしぱり、肩が大きく足もとがほそくミイラのやうなかつかうにしたことは、こんどの發掘からほど推定することができる。

『儀禮』の士喪禮は喪儀のことをこまごまとかいてゐるけれども、さて遺骸をどう處理したかといふことになる、隔靴搔痒の感がふかい。

まづ小斂には布絞、衾、散衣、祭服等十九稱をひろげたといふから、この上に遺骸をうつし、祭服と散衣をきせ、つぎに衾をまきつけ、上から絞でしばつたのであらう。

もつともこれにさきだつて、からだに直接するものとして麻布の明衣裳があつた。そのうへに祭服散衣をつけたのであるが、それにとりなつて桑の笄、白纁の瑱米貝の舎、王棘の決があり、また緇帶、韎韐、竹笏、白履をつけた。そしてそれからきれでつくつた掩、幘目、握手といふものがあつて、それぞれ首、目、手をつゝみひもをかけ、最後に冒といふもので全身をつゝんだといふ。冒はたゞのふくろ、上下に二分し上を質といひ、下を殺といつた。ふつうなら衣、裳といふところだが、喪葬の儀式だから常語をさけた一種のいみじとばとかんがへられる。質はくろく上からかぶせ、殺はあかく下からはかせ、兩方を縫ひつけたといふ。衾と絞とはこの上にほどこしたのた。

さらに大斂になると、このうへに布絞、紕、衾二、君襚、祭服、散服、庶襚すべて三十稱をかさねたといふのである。『禮記の』喪服大記には、小斂にも大斂

にもみな左衽して「絞をむすび、紐せず」といふ。右衽して紐でとめるのは脱いだり着たりする便のためで、死人にはその用がないからおのづから左衽にし、絞るのだといつてゐる。

それから小斂には「布の絞、縦なるもの一、横なるもの三」、大斂には「布の絞、縦なるもの三、横なるもの五」とある。陽高の漢墓ではどれにも麻布の絞はなかつた。あかい絹の絞ばかりであつたが、そのむすび目がいかにもつよく印象にのこり、絞といふことばがはつきりと頭にしみこんだ。たゞし、縦にとほつたものはなく、たゞ横のものが五、六個所にしめてあつた。

しかし、陽高の場合でも、どんなふうにもきせ、ふとんをまいたかはあきらかでなかつた。どうせ肌にはきものをきせたものであらうが、うへはあきらかにふとんをまきつけたものであつた。ふとんときものでぎつしりとかたまり、そのあつさが二十センチにおよぶのだから、衣裳萬領のことばもなるほどとおもはれる。

十二號墳（耿嬰墓）北棺の場合は遺骸のした一面にしいた一枚の麻布が注意された。どうもきものにしたて

ゝあつたやうにはみえなかつたが、肌につけた『土喪禮』の明衣裳の意かとおもはれた。それから足には麻の襪をつけ、皮の履がはかせてあつた。

二、珠襦玉柙

『呂氏春秋』の節葬篇に近來埋葬の奢美にわたるを敘し、「含珠鱗施」といふことばがみえてゐる。

含珠は口にくくます珠玉のことであつて、小さい珠玉のやうにもとれるが、漢代、およびそれよりもやゝ古い時代からは蟬のかたちにした含蟬といふものがひろくつかはれてゐた。鱗施は鱗のごとく施すといふのであるから、小さい玉片を鎧の小札のやうにならべたもの、さういふもので衣裳になつたもの、したがつて玉衣といふやうに解釋されてゐる。これにあたる遺品は往々先秦時代の遺物中にみいだされる。有名な新鄭の古墓から出土した玉片は、おそらくかういふ目的のものとして推測されてゐる。またなかには白い石片でつくられた代用品もある。

これらは決して古風な埋葬法でなく、たゞ奢侈のおもむくところ、玉に對する特殊な好尚と相俟つてつひ

かういふことになつたのだとおもふ。

漢代になつては名臣霍光の歿くなつたときに、宣帝および皇太后はしたしくその喪にのぞみ、「金錢繒絮、繡被百領、衣五十篋、璧珠璣玉衣」などを賜つたといふことが『漢書』卷六八霍光傳にのつてゐる。金錢繒絮繡被百領などといふことは、こんどの陽高の發掘にたくさん五銖錢が棺底にしきならべられてあつたのや、すべての遺骸が十重二十重に刺繡や錦の絮ぶとんにくるんであつたのを見ると、よく理解されるころである。棺の上にもたいてい刺繡とか、羅とか、繒とかぐかけてあつた。くはしいことはいづれ報告書をつくるつもりであるが、だいたいことは、『太東亞學術叢誌』の第一冊を参照されたい。

こゝにいふ、玉衣は正に『呂氏春秋』にいふ含珠鱗施のたぐひであらう。顏師古は注して「漢儀注」の文を引用してゐるが、同文は『漢書』卷九三董賢傳「後漢書」卷一六禮儀志の注にもひいてあつて、衛宏の『漢舊儀』の文であることがわかる。それは天子の大喪に關したもので、全文は左のごとくである。

漢舊儀に曰く、帝が崩すれば陰には珠をもつてし、纏

ふには、緹縵十二重をもつてする、玉^①をもつて襦をつくり、鎧のかたちのやうに、これを縫ひつゞり、黄金をもつて縷とする、腰以下は玉をもつて札^③をつくり、長さは一尺、廣^④さは二寸半、押^⑤をつくつて、下は足にいたる、また縫^⑥ふに黄金縷をもつてする、諸の衣衿を請うてこれを斂める、すべて乗輿の衣服已に御すれば、すなはちこれを藏し、崩すればみなもつて斂める。

①、董賢傳注は珠につくる。②、霍光傳注は緹につくる。

③、董賢傳注は押につくる。④、霍光傳注によつておぎなふ。

⑤、後漢書劉盆子傳注は匣につくる。⑥、霍光傳注は緹につくる。

注は緹につくる。

これによれば玉をもつて上衣につゞりつけて、珠襦といひ、玉札一尺幅二寸五分のものをもつて腰以下にとりつけ、玉押もしくは玉匣と書いたやうである。

おそらく士喪禮の質殺の冒にあたるものとおもふ。

『札記』喪大記には君は錦冒、黼殺、大夫は玄冒黼殺、士は緇冒黼殺といふことがある、一轉すれば珠冒玉殺になりさうなところである。

『漢書』董賢傳には本文中に珠襦玉押とかいてあるが、『後漢書』卷十后妃傳、卷四一劉盆子傳には玉匣

とかいてある。ことに後者のは赤眉の賊が前漢の諸陵をあばいた記事で、

すべて賊のあばいたところで、玉匣をもちひて斂してゐるものはみな生きたものゝやうであつた。

といつてゐる。

漢代の玉匣はすでに漢末衛宏の「漢舊儀」にその説明があつて、腰以下をおほふ脛あてのやうなかつかうのものとみえるがこんどのやうに玉をたくさん嵌入した漆の匣とも匣ともいへるやうなものがでると、やはり玉匣の名を聯想せしめるのである。

陽高漢墓の玉の匣が漢舊儀の「玉匣」の名にあたるかどうかは別としても、その用途は劉盆子傳の玉匣に暗示されるやうに遺骸を完全に保存しようとしたものであることはあきらかである。「劉盆子傳」の記事は玉の匣にをさめておくと完全に朽ちないといふ一般の信仰を背景としてゐるのである。

三、上簾下莞

「士喪禮」には牀に簾あり、その上に莞席をしき、またその上に簾席をしいたとある。

簀は第なり（爾雅釋器）牀版なり棧なり（説文）牀版なり（方言郭注）といふから、竹とか板を多少すき間をあけながらならべたものであるらしい。『淮南子』説山訓の鴻烈解に「招簀は死者浴牀の上の櫛である」といつたのもおなじことをいふのであらう。つまりすのこである。『史記』范雎傳には范雎が死んだまねをして簀にまかれてゐたといひ、その索隱には「簀は葦荻の薄をいふのだ、これをつかつてその屍をつゝむ」といつてゐるので、屍をつゝめるやうなものであつたことがわかる。それで陽高漢墓の死骸をつゝんであつたむしろはこの簀といふものであらうか。ちやうど見たところは、わが國の祭祀につかふあらこものやうなものであつた。あみ方もおなじやりかたであつた。

『禮記』喪大記には簟席、蒲席、葦席の名がみえ、注にはこれをうはしきとし、下にはいづれも莞席をしいたものと解してゐる。『説文』には簟は竹席なりといひ、簾のあらひ竹席に對してゐる。蒲席、葦席、莞席、も材料の名がわかるので、あみ方はわからない。陽高漢墓では死體をつゝんだあらこものほかに棺の下に、しいたあじろ目のあんべらがあつた。これが材料のほ

どはよくわからなかつたが、簟席といはれるものではないかとおもふ。棺内のあらこも簀ではどうも文献のをさまりがわるく、むしろ下にしいたといふ莞席と解したいのである。材料關係はいま別として『士喪禮』の上簟下莞はなんとなく、このあんべらこのあらこもにあてたいやうな氣がする。材料をしらべればまた別の手がゝりがえられるかも知れぬが、いましばらくはこのまゝにしておく。（昭和一八・六・一九記）